

公開講演1(PL1)

池間方言形態音韻論--名詞提題形, 対格形を中心に¹

田窪行則(国立国語研究所)

ytakubo@ninjal.ac.jp

1. はじめに

本発表では宮古島西原地区で話されている宮古語池間方言の形態音韻論について概説する。まず、簡単に音韻論の概説を行い、表記を導入する。この音韻論の部分は表記のために導入するもので、網羅的な解説ではない。以後の表記法は音韻論に基づいて導入した正書法によって行う。次に名詞提題形, 対格形を中心に名詞形態音韻論について概説する。必要に応じて、動詞形態音韻論に触れる。本発表の目的は池間方言の記述的な体系を示すことではなく、池間方言の形態音韻論に関して問題点を明らかにすることである。西原で話されている池間方言全般に関する概説は林(2009), Hayashi(2010, 2013)を見られたい。

2. 音韻論と表記

2.1. 音韻論

母音 池間方言の母音には以下のものが区別される。短母音は /a,i,u,i/ の 4 つがあり、長母音としては /a:,i:,u:,i:,o:,e:/ がある。/o:/, /e:/ は応答詞(o:, e:) , 終助詞(do:) にしか使われない²。/i/ は, /s, dz, c(=ts)/ の後にしか現れないが, /s/ の後に /i/, /u/ が現れるため最少対が作れる。

/siba/(心配) : /siba/(唇) : /suba/(そば) , /muusi/(燃やす) : /muusi/(燃やせ)

子音 子音は以下のものが区別される。/p,b,t,d,k,g,c(=ts) , dz,s,f,r,m,n,ɲ,n,j,w,h,j/

/hu/[ɸu:] と /fu/[fu:] は対立する。/hu:/(している) vs. /fuu/(来る)。

他の宮古語の方言は音節末に /m/ と /N/([n]~[ŋ]) の対立があるのに対し、池間方言の若い話者(70 代以下) には対立がなく、/N/のみである。池間方言では鼻音は鼻音と結合して二重鼻音をなしたり、阻害音の前に来ることができるがその場合も、対立はない。

[dz] と [z] は対立がなく、自由異音であると思われる。また、/c/, /dz/ は /i/ 以外の母音の前では口蓋化する。したがって、{/c/, /dz/} +{/u/, /a/} と{/c/, /dz/} +{/ju/, /ja/} とは中和する。

/ci:/(乳) vs. /cju:/(露)

*[tsu], *[tsa] vs [teu], [tea], 例 /cju:/ [teu:](露) , /acja/ [atea](明日)

¹ 本稿のデータは発表者の宮古島西原地区でのフィールドワークに基づく、主なコンサルタントは仲間博之氏(71 歳)で、ほかにも何人かの話者(70~75 才)に調査した。池間方言の実際の発音や談話資料に関しては発表者の作ったデジタル博物館サイト

(<http://kikigengo.jp/nishihara/doku.php?id=start>)を見られたい。また、本発表の一部は Takubo (2015), セリック・田窪 (2013), Celik and Takubo (2014) ですでに発表したものを含む。

² 借用語には /e/, /o/ の短母音も現れる。

他の子音に関しては/u/と/ju/, /a/と/ja/は対立する。例 /ku:/(苦しい) /kju:/(今日)
二重子音/zz/は口蓋化しない。例 /zzu/(魚)
/cc/は口蓋化する。例 [umatteu] (=umac+u) [ttsu]は存在しない。

/p/は非常に少数の単語と借用語に現れ、他の宮古方言の/p/はほとんどが/h/に対応する。

/pa:/(おばあさん), piiki(穴をあける)

音節 鼻音は音節末だけでなく、音節初頭にも現れるが、単独で現れる場合、同一調音位置の二重子音の場合は/m/, /n/の対立がある。調音点が異なる鼻音の組み合わせ(nm, nm) はない。阻害音の前では/m/, /n/の対立はない。[nta]~[mta]は自由変異であると思われる。音節の構成は以下のようになる。

A : (C1) (C2) (G) V1(V2) (C3)

これとは別に鼻音のみからなる音節が可能である。

B: /NN/(=/N:/) (芋), /ŋN/(汲む, 踏む)

特殊な分布を持つ子音

/N/ : j, w, h 以外の子音の前に現れる。/nta/(土), /nsu/, /n:ku/(膿), /ncci:/(汁)

/ŋ/ : /N/, /n/, /m/の前にあらわれる。語中には来ない。/ŋna/(綱), /ŋmu/(雲)

無声化のマークと考えることもできる

重子音 /j,w,h, ŋ/以外の子音が二重母音になることが可能である。/r/は二重子音になると/r/で発音される。

/t:, k:, c:, f:, s:, z:, r:, v:, m:, n:/

例 /t:a/(舌), /k:unuci/(9つ), /c:jui/(壊れる), /f:a/(子供), /mullu/(むろあじ)

/s:a/(foot), /z:a/(父親), /v:adi/(売ろう), /m:a/(母親), /n:a/(巻貝)

自由形態素(単語)は最低2モーラなければならない。1モーラからなる自由形態素はない。音節初頭の二重子音、複合子音があれば、母音が短母音でも2モーラをなすと考えなければならない。したがって、C1は1モーラをなすと考えなければならない。二重母音については後述する。

2.2. 表記法

- 以下形式の表記には//を省略し、以下の簡略した音素表記によって表記する。
- 長音記号は用いず、母音を二つ、子音を二つ書く。

- 無声鼻音は、無声化表示と解釈し、h+鼻音で表記する。hは1モーラの長さを持つ
例 hnu(雲)
- mと対立するnとn, mの中和した鼻母音Nとは分布により区別できるためnで表記する。例 mn(芋), nta(土), ssan(風)

3. 名詞の形態音韻論 主題と対格形を中心に

3.1. 主題形と対格形の分布

池間方言の主題形は以下のような分布をなす。

主題形

- aで終わる名詞の後 =a ffaa ffa(子ども) +a
- uで終わる名詞の後 =u zzuu zzu(魚) +u
- iで終わる名詞の後 =jaa sakjaa saki(酒) +a
- 二重母音、長母音で終わる名詞の後 =ja maija mai(米, ご飯) +a
- Ciで終わる名詞の後 CCa dussa dusi(友達)+a
- nで終わる名詞 nna inna in(海³, 犬)+a

対格形の分布もほぼ主題形と並行する。

対格形

- a、uで終わる名詞 =u ffa+u>ffau zzu+u>zzuu
- iで終わる名詞 =juu saki+u>sakyuu
- 二重母音、長母音で終わる名詞 =ju mai+u>maiju
- Ciで終わる名詞 =CCu dusi+u>dussu
- nで終わる名詞 nna in+a>inna

従来、他の宮古語の方言に関する記述(狩俣(1992)など)では提題形はja, 対格形はjuを基本的な形として、他の形式をそれらからの変化形とするのが普通であると思われる⁴。

従来の説明⁵

- a/uで終わる名詞:jを削除する。 ffa=ja>ffaa zzu=ju>zzuu
- iで終わる名詞:iを削除して母音を伸ばす。 saki=ja>sakjaa saki=ju>sakjuu
- 二重母音、長母音で終わる名詞:そのまま mai=ja mai=ju

³ 高齢者(80代後半以上)では他の宮古語の方言と同じくimの形で現れる。その場合は, immaとなる。

⁴ 上村(1992:802)ではwa>a>jaという変化を考えているようであるが「前舌形の母音と結びつくときのわたり音を取り込んで」(ia>jaという意味か)とあるのみで正確には分からない。

⁵ 例外はShimoji(2008)で伊良部島方言に対して、本稿と同じく、提題/a/, 対格/u/を基底の形式としている。Shimojiの観察と説明はほぼ池間方言にもなりたつ。本稿はこれと同じ立場で、説明を派生でなく、制約的に書きなおし、根拠の一部を加えたものとなっている。

- d. Ciで終わる名詞：iを削除し、順行同化する $dusi=ja>dussa$ $dusi=ju>dussu$
 e. nで終わる名詞：順行同化 $in=ja>inna$ $in=ju>innu$

この場合、uで終わる名詞に提題形をつけた形はそのままで説明できず、jを削除してから、uaをuuに変える規則を立てる必要がある。 $zzu=ja>zzua>zzuu$

しかし、通時的な変化として、日琉祖語の形を提題形*pa、対格形*woと考えると*pa>ja, *wo>juは多少問題がある。それぞれ*pa>wa>a, *wo>o>uのような変化を考えるべきであろう。となると、提題形はa、対格形はuとするのが自然となる。このやり方では次のような規則を考える必要がある。(a)はjaの場合より簡単であるが、そのかわり(d)はjを挿入する必要がある。(b, c)はjaの場合と同じであるので、その意味では記述力は変わらないが、(e, f)はjaとするより一見余計な操作が必要に見える。

aを基底形とする場合の説明

- a. aで終わる名詞の後 =a ffa ffa=a そのままつける
 b. uで終わる名詞の後 =u zzu zzu=a>zzuu uaをuuに変化
 c. iで終わる名詞の後 =jaa sakjaa saki=a>sakjaa
 d. 二重母音、長母音で終わる名詞の後 mai=ja maia>maiija jを挿入
 e. Ciで終わる名詞の後 CCa dussa dusi=a>dussa
 f. nで終わる名詞の後 nを挿入 in=a>inna

以下では、提題形をa、対格形をuとし、非常に一般的な制約を仮定するだけで、簡潔な説明が可能であることを示す⁶。

以下のような規則・制約を考えると主題と対格の分布を同じように扱える(Celik and Takubo (2013)).

(A) 母音を三つ続けてはいけない： $*VVV>VVja$ ⁷

jは母音の3連続を避けるために挿入される。挿入子音はjとwの二つの可能性があるが、wはこの言語の制約に反するためjが挿入される。

(B)この言語ではiaとiuという母音連続は許されないため、iはグライドになる。ia>ja, iu>ju

(C)モーラの数と同じでないといけない。縮約をすれば代償延長をする.: Ci+a > Cj+a>Cja>Cjaa

(D)音節境界は保持しなければいけない：C+a>C+Ca

⁶ 以下の記述は Kenan Celik との共同研究の一部である。

⁷ この制約は最後の母音がiの場合成り立たない(下地理則個人談話：2018年7月30日)。faai(食べられる), dooi(doo+i)

具体的に見てみよう。まず、(A)により、長母音や二重母音終わりの名詞に提題 a, 対格 u が来た場合、この制約に引っかかる。このため形態素境界を守りながら(制約(D)), j が挿入される。

(A)*VVV

長母音で終わる名詞

suu(冬瓜)+a>suua jの挿入>suu=ja

suu+u>suuu jの挿入>suu=ju

二重母音で終わる名詞

mai(米) +a>maia>mai=ja

inau(竜巻)+a>inaua>inau=ja

mai+u>maiu>mai=ju

inau+u>inauu>inau=ju

(B)により、上昇二重母音はこの言語では許されない。したがってこの母音連続を避けるため、i をグライドにする⁸。i がグライドになるとモーラ数が変わるため、長母音化によってモーラ数を保持する(C)。

(B) *iu, *ia. (C)代償延長

banti(私達) +a>bantia>グライド化>bantja>代償延長>bantjaa

banti+u>bantiu>bantju>bantjuu

(D)の「音節境界の保持」であるが、これを適用するためにはいくつかの前提が必要となる。まず、Ciで終わる名詞におけるiは、自由形態はCで終わってはいけないとでもいう制約を仮定し、これらの語は単独で発音される場合にはiが挿入されていると考えねばならない。Shimoji(2008)ではこれらの語は最初から子音終わりの単語として記述されているが、池間方言では、明らかに母音が単語末に聞こえるためこのような仮定が必要である。そのように仮定すると、(D)の制約を守るため、同一調音点の子音が挿入される。

umac(i)(火) umac+a>*umaca>umac=ca

umac+u>*umacu>umac=cu

このように考えるとn終わりの単語も同様の現象と考えることができる⁹。

⁸ *uaもこの制約の一部とすることができるが、なぜwaにならないかが問題となるためここでは次節で別の制約を与える。

⁹ もし、in+jaとして順行同化するとするとn+j>nnという順行同化が仮定されなければならない

in (犬) in+a>*ina>in=na
in+u>*inu>in=nu

林(2013)では、語末の i を基底から入っているものとし、子音終わりの単語を認めていない。彼女は母音連鎖 iV が許されないため i が脱落し、モーラ数を保持するため、C が重子音化すると考える。

dusi=a>dusa>dussa

この分析のメリットは次の動詞の活用形の交替を説明できることである。

終止形	否定形
sii (知る)	ssan
cii(釣る、着る)	ccan
cufii(作る)	cuffan

まず動詞の基本語幹を si-, ci-, cufi- とすると否定形-an との結合の結果を同じように記述することができる。終止形は通常 i をつけるが、ii が順行同化で ii となる。

この説明にはいくつかの問題がある。まず、-an は子音語幹の動詞に付く語尾で、母音語幹は-n が付く。

	終止形	否定形
子音語幹動詞	juman	jum (読む)+an
母音語幹動詞	miin	mii(見る)+n

また、母音語幹、子音語幹で形態が変わるものに使役形接辞(母音語幹動詞:-ssas/子音語幹動詞:-as)、受身形接辞(母音語幹動詞:-rai/子音語幹動詞:-ai)、尊敬形接辞(母音語幹動詞:-samai/子音語幹動詞:-amai)があるが、上記の動詞はすべて子音語幹としてふるまう¹⁰。

終止形	使役形	受身形	尊敬形
sii (知る)	ss-as	ss-ai	ss-amai
cii (釣る、着る)	cc-as	cc-ai	cc-amai
cufii (作る)	cuff-as	cuff-ai	cuff-amai

ないが、池間方言にはそのような例はほかにはない。

¹⁰ ほとんどの動詞が母音語幹の形式も持つため、ssi-samai, cii-samai, cuffi-samai の形も可能である。

もし、 $i=a>a$ という規則を仮定すると、これらの接辞が付く前に i を削除しないといけないが、その場合、削除のための環境が生じる前にこの規則をかけないといけなくなる。ここでは、これらの動詞の語幹を子音終りとすべきである。その際、重子音化は、音節境界の保持というより、形態素境界の保持のために考えるべきかもしれない¹¹。

s(知る), c(着る), cuf(作る)

3.2 ua>uu の交替と動詞形態論

最後に $ua>uu$ の交替を考える。本発表では先に述べたようにこれを順行同化として見ている。この交替は上昇二重母音に対する制約でも記述できるが、その場合、なぜ $ua>wa$ のようなグライド化がおきないのかを説明する必要がある。動詞の否定接辞が付いた場合でも同様の制約があると考えられる。

池間方言の動詞には語幹が u で終わるものがある。このうち fau , kau は子音語幹動詞のようふるまう。

fau (食べる)	$faan$	$fa-ai-$	$faa-s-$
kau (買う)	$kaan$	$ka-ai-$	$kaa-s-$

これらの動詞は、日本語共通語のように faw , kaw のような基底形を考えることもできるが、日本語共通語で $kaw-anai$ のように w が異形態として現れるのに対し池間方言では w は異形態としても現れない。 w を立てたとしても必ず削除しなければならないわけである¹²。

これに対して fuu , $umuu$ は母音語幹動詞のようふるまう。

fuu (来る)	$kuu-n$ ¹³	$kuu-rai-$	$kuu-ssas-$
$umuu$ (思う)	$umuu-n$	$umuu-rai$	$umuu-ssas-$

さて、 $umuu$ の受身形の否定は $umuu-rai-n$ のほかに $umuuin$ という形もある。この形式は子音語幹に由来すると考えられる。つまり次のような規則変化を考えることができる¹⁴。

¹¹ 語幹を二重子音とすることも可能である。その場合は $*CCi$ のような制約があると考えて、 Cii の形を出す必要があるだろう。これはセリック・田窪 (2013), Takubo (2015) で示した考えで、Shimoji (2017), 下地 (2018) が伊良部島方言の同様の現象の記述に採用している。

¹² そのため Shimoji (2008) は、伊良部島方言に関する記述で、子音語幹、母音語幹といわず、クラス 1, クラス 2 という名称を採用している。

¹³ 池間方言 (及び他の宮古方言) では ku は fu に変化しているため $fu-u$ が終止形になる。 $kuu-n$ 「こ-ん」に対応する。

¹⁴ この観察は Kenan Celik による。

umu(w)-ai-n>umu-ai-n>umu-ui-n

同様の派生がこの動詞の使役形でも観察される。

umu-as>umuus-

つまり、umu は子音語幹動詞と同じ振る舞いもするわけである。したがって、ua>uu という規則を動詞においても想定する必要がある、名詞においても同様の規則が想定される。

4. 結論

以上提題形と対格形を中心に宮古語池間方言の形態音韻論を見てきた。提題の形式を=ja でなく=a, 対格の形式を=ju でなく=u とすることで非常に一般的な制約から実際の形式が導き出されることを見た。

参考文献

- セリック・ケナン, 田窪行則 (2013) 「適性理論による池間方言の形態音韻論」筑紫日本語研究会 2013 年 11 月 2 日. 九州大学
- Celik, Kenan, Yukinori Takubo (2014) Ikema topic and accusative marker, an OT analysis, FAJL poster sessions, NINJAL.
- 林由華 (2009) 「琉球語宮古池間方言の談話資料」大西正幸・稲垣和也 (編) 『地球研言語記述論集 1』, 153 - 199. 言語記述研究会
- Hayashi, Yuka (2010) Ikema. : Michinori Shimoji and Thomas Pellard (eds.)
An Introduction to Ryukyuan Languages, Research Institute for Language and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, pp.167 - 188.
- 林由華 (2013) 「南琉球宮古池間方言の文法」京都大学博士論文
- 狩俣繁久(1992) 「琉球列島の言語(宮古方言)」『言語学大辞典第 4 卷(下-2)』848-863. 三省堂
- Shimoji, Michinori (2008) A Grammar of Irabu, A Southern Ryukyuan Language. Ph. D. thesis. Australian National University.
- Shimoji, Michinori (2017) A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan language. Fukuoka: Kyushu University Press.
- 下地理則 (2018) 『南琉球宮古語伊良部島方言』東京外国語大学アジア・アフリカ研究所
- Takubo, Yukinori (2015) Issues in the verbal morphophonemics of Ikema Ryukyuan. Paper presented at Oninron Forum 2015.
- 上村幸雄 (1992) 「琉球列島の言語(総説)」『言語学大辞典第 4 卷(下-2)』771-814. 三省堂

公開講演2(PL2)

琉球方言音声・アクセントの諸相

上野 善道（東京大学名誉教授）

1. はじめに

本講演では、琉球方言の音声・アクセントの特徴的な側面を取り上げる。音声（分節音）面については、子音では、喉頭化音（無気音）と非喉頭化音（有気音）、声門閉鎖音の有無の対立、語頭重子音（長子音）、唇歯音、無声鼻音、ガ行鼻濁音、各種のL音や舌さきふるえ音を含むラ行子音の変種、前鼻音子音の通時的反映等、母音では、母音体系、各種の中舌母音とその由来等を、音節構造ではCVCの閉音節の存在を話題にする予定である。

しかし、去る7月7日にこの沖縄国際大学で開かれた沖縄言語研究センター40周年記念の講演「これまでの琉球方言アクセント研究とこれから」の中で、「これまでの研究」の第1期（戦前）として、服部四郎、平山輝男と並んで、従来ほとんど注目されて来なかった大湾政和（1933, 1937a,b）の那覇アクセントの記述¹を見直す必要があるが、詳細は日本音声学会の講演で行なうとした。それを承けて、かなり込み入った論になる関係で事前の配布資料が必須と思われるその分析に専ら予稿集の紙面を使い、他は当日のスライドに譲る。

2. アクセント

2.1. 大湾政和による母方言那覇アクセントの記述

沖縄県師範学校の教諭であった大湾の那覇市内の出身字と生年は未詳であるが、那覇市は「今日は泊・垣花・壺屋を除いて殆んど同一アクセントとみてよい」（1933: 14）とあることから、市内中心部のどこかと推定される。刊行年から見て、生まれは明治に違いない。

当時のアクセント3段観に従って「上中下」を上線、無印、下線で示しているが、適宜、〔上昇〕、〔下降〕の記号に置き換え、問題の箇所はそれと注記する。そのカタカナ表記は、長音（ー）を明示する表記に改める。アチョオル→アチョール、カアチイ→カーチー、ンンス→ンースなど。ヂ→ジに。なお、キィ=ji、ヲゥ=wuとし、ウィ=?wiである。

2.2. 2モーラ語～6モーラ語の型の一覧

2.2.1 CVCVの2モーラ2音節語は、単独では〇〇型（無印は中中型）1つであるが、助詞ヌ（が）、ヤ（は）を付けると(1)のように三分されるという事実を初めて報告している。多数派優先の配列順を、現在使われているA類、B類、C類に相当する順に並べ替えて示す²。特殊拍の振る舞いが見えやすいように、一般拍は○で、特殊拍は「ー、ン、イ、ッ」

¹ 服部四郎（1959[1937]）は、大湾（1937a）を取り上げ、那覇と首里等のアクセントの違いを住民の集団的移動によるする想定と、アリ・ヨリに当たる動詞の由来に関する説とを批判しているが、那覇方言のアクセント記述の内容には何も言及していない。他にも内容を論じたものは未見。

² 「船」はC類であるが、これと同じ振る舞いをする単語は少なく、その語彙リスト（第5節アクセント語彙）を見ても、第3類語や漢語も含む「朝、麻、アトゥ（後、跡）、イグ（以後）、海、

で示した音構造も下に並べる。ンカシ (昔) など、それ自身で1音節となるンは○とする。

- (1) ルシヌ (友が), アミ[ヌ (雨), [フ]ニヌ (船); ルセー (友は), ア[メー, [フ]ネー
 ○○ヌ ○○[ヌ [○]○ヌ ○○ー ○[○ー [○]○ー

2モーラ1音節語は、長母音 CVV の場合、1つの単独形○ー型が(2)のように2つに分かれるのみである³。「カー」など、元 CVCV の「川」由来でも同じ振る舞いをする。長音節内での音調変動はない(1937a: 26)。また、[○ー]ヌ/ヤは、構造上ありえないと見る(後述)。

- (2) カーヌ (井戸が), ティー[ヌ (手); カーヤ (井戸は), ティー[ヤ
 ○ーヌ ○ー[ヌ ○ーヤ ○ー[ヤ

ところが、ンに終わる CVN の単語は、単独で同じ○ン型が(3)のように3つに分かれる。

- (3) タンヌ (炭が), ジン[ヌ (銭), [ビン]ヌ (瓶); タノー (炭は), ジ[ノー, [ビ]ノー
 ○ンヌ ○ン[ヌ [○ン]ヌ⁴ ○○ー ○[○ー [○]○ー

[○ン]ヌ型は、「瓶」の他に「ブン (盆), ムン (紋), パン, ピン, ペン」があり、語頭

膿, グミ (ゴミ), 匙, 時期, チミ (罪), チユ (露), 梨, ヌミ (蚤, 鑿), ムン (紋), バサ (馬車), 春, 輝, ビワ (枇杷), 瓶, フニ (船, 骨), ブン (盆), ヤニ (脂), 弓, ルマ (土間), 和歌」が出ているだけである。「浜」も本文にはそれとあるも(1937a: 27), その語彙リストにはハマとある。他の諸方言でC類に属する(可能性のある)単語の大半は、第1音節が長母音の○ー[○で現われる。例: イーチ (息), イーチユ (糸, 絹), イービ (指), ウーク (奥), ウーシ (臼), ウービ (帯), カーギ (蔭, 容姿), カーミ (甕), クーシ (菓子), クーガ (卵), グーシ (竹串), クーブ (昆布), サージ (鉢巻), シーシ (獅), シージャ (兄), タービ (足袋), ティーラ (太陽), ティール (箆), ナーカ (中), ナーフア (那覇), ナービ (鍋), ニーブ (柄杓), ヌーシ (主), ハーイ (針), ハーチ (鉢), ハーマ (浜), フール (便所), ホートウ (鳩), マーイ (鞠), マーク (幕), マース (塩), マーミ (豆), ムーク (聾), ムートウ (元, 本家), ヤーマ (罌), ユール (夜), キーン (縁側), ヲウーキ (桶), ヲウーヌ (斧), ンース (味噌), ンーチャ (土), ンージュ (溝)。Cf. ク[ルー (黒), シ[ルー (白); ヌージ (虹); チーバ (牙)。

³ ○ー○と同じ型(その後のa類)は「胃, キイー (柄, 亥), ウー (卯), キー (毛), ケー (筍), シー (瀬, 詩), ジー (芯), チー (気, 血, 釣瓶), 痔, 名, ニー (音, 値), ファー (葉), フィー (日), フー (帆, 麩), ブー (歩), 間, 実, 巳, ムー (藻), ユー (代), 利 (利子), ウィー (上), トー (籐, 唐), ルー (櫓, 龍, 自分), フェー (灰), メー (飯)。

○ー[○と同じ型(b類)は、「木, クー (粉), シー (酢), 田, チー (乳), 菜, ニー (荷, 根), ヌー (野), 刃, 齒, フィー (火, 尻), ミー (目), ユー (湯, 夜), キイー (絵), グー (碁), ジー (地, 字), セー (鰕), 茶, フー (果報), モー (野原), ヤー (矢, 家), 輪, ヲウー (尾, 苧), アー (泡), カー (皮), クィー (声, 杭), クェー (肥え), ジュー (尾), チュー (今日), ソー (竿), トー (塔), フェー (南), 棒, メー (前), レー (代償), ロー (蠟), ヲー (王)」。なお, ヲウー (緒), ガー (我) は, 1937a と b で違い, どちらか不明。

⁴ 1937a: 28 の例と同: 32 の表では[ビ]ンヌなれど, 「助詞ガを続けると上上下下型になりハを続けると上下下型となる」とあることからの判断。両方が同じ型ならこういう書き方はしないはず。

が両唇音の単語のみという。[オン]ヌの可能な撥音は、長音とは振る舞いが異なる。

2.2.2 3モーラ語は(4)の7つの型が見つかり(大和と宝は同一視)、しかも大きな交替を起こす。この交替現象の記述も大湾が最初である。ただし、ここからは、助詞付き形の記述が少なくなる。() 内に入れた助詞付き形は私の推定形。他に、両著の間、ないしそれぞれの中で、記述の矛盾と見られる箇所も出てくる。1933 はガリ版刷りで、とりわけその音形を表示したローマ字は判読困難な箇所もある。また、同書は上中下のいわば3線譜状に示しているが、「中」線のすぐ上にあるものとすぐ下にあるものの別は有意か不明で、事実上無視する。なお、(4)以下の配列は、型の姿を考慮して並べた。

(4) 単独形	～が	～は	他の語例 (注記も含む)
マチヤ (店)	マチヤヌ	マチヤー	フクイ (埃), ハンタ (端), カチュー (鯉)
ヤマ[トゥ (大和)	ヤマ[トゥヌ	(ヤマ[トー)	カニ[ク (兼久=地名), ホー[トゥ (鳩)
タカ[ラ (宝)	(タカ[ラヌ)	タカ[ラー	(「大和」型は固有名のみともあるが。)
グ[ユー (御用)	グユー[ヌ	(グユー[ヤ)	ウ[コー (お香), ク[ルー (黒) 等。
ナガ[ニ (背骨)	ナ[ガ]ニヌ	ナ[ガ]ネー	ハカ[マ (袴), フク[ル (袋) など多数。
ク[ムイ (池)	ク[ム]イヌ ⁵	ク[ム]エー	トゥ[スイ (年寄り。助詞付形記載なし)
ハ[サン (鉄)	ハ[サン]ヌ	ハ[サ]ノー	ガ[ジャン (蚊), ア[ダン (植物) 等。
マー[チ (松)	([マー]チヌ)	[マー]チェー	(おそらくナン[カ (七日) 等々も。)
	(アシ[ジャ (下駄),	アチ[キ (熱気) は,	アシ[ジャヌ (主), ア[シ]ジャヌの両様に。)

音構造表示

○○○	○○○ヌ	○○○ー	
○○[○	○○[○ヌ	○○[○ー	
○[○ー	○[○ーヌ	(○○ー[ヤ)	
○○[○	○[○]○ヌ	○[○]○ー	
○[○イ	○[○]イヌ	○[○]○ー	
○[○ン	○[○ン]ヌ	○[○]○ー	
○ー[○	([○ー]○ヌ)	[○ー]○ー	(○ン[○, ○ッ[○, ○イ○)

上昇のある型では、語末が特殊拍(M)の語は○[○M となり (1937a: 28)、その M が長母音か二重母音副音か撥音かにより、助詞付き形が異なる振る舞いをしている。一方、○M[○ では、ナン[カ (七日), ウッ[トゥ (弟), クイ[ミ (暦) も含め、同じ振る舞いをすると見る。この方言では、二重母音の中で下降する場合を除き、重音節全体としてその中で音調が変わることはない。なお、単独形に[○]○○は報告されていない。また、2.4.1 に後述の

⁵ ナガニとクムイ (籠もり) に関して、「中中上型、中上上型が助詞に続くと共に中上下下型に変わり二者の区別は不能になる」(1937a: 29) とある。ちなみに、垣花方言ではク[ムイ]ヌとなる。

理由で○[○]○, [○○]○型は存在しないものと考えられる。[○ー]ヌ/ヤの不在も同様。

2.2.3 4モーラ語には(5)の型が出ている。助詞付き形の情報はさらに減り、助詞付きでは異なる型になると予想されるものも単独形の同じ型の中にまとめて掲げられている。私見でそれを分けて掲げる。特殊拍を含まない○○○[○型は記載がなく、存在しないものと見た。5モーラ以降の例から見てその可能性のある、後部が3モーラ語（で、かつ最後が重音節でないもの）からなる複合語のティウ[クリ（手遅れ）、ユフ[カシ（夜更かし）]なども、最終拍だけが高くなる型では出ていないからである。最終拍だけが低い型は、その前が重音節の○○M[○構造ばかりである。

(5) アカガイ（明るい所）	アカガイヌ	アカガイヤ	アチカビ（厚紙）
[ウミ]ンチュ ⁶ （海人）	([ウミ]ンチュヌ)	([ウミ]ンチョー)	
[カー]チー（夏至）	[カー]チーヌ	[カー]チーヤ	[キイー]ムン（良物）、 [シン]パイ(心配) ⁷
ウ[グ]シク（お城）	(ウ[グ]シクヌ)	ウ[グ]シコー	ウ[トゥ]スイ（老人） ⁸
ター[リー]（大人）	ターリー[ヌ	(ターリー[ヤ)	ハク[ソー]（百姓）
ラン[ガサ]（洋傘=蘭傘）	ラン[ガ]サヌ	ラン[ガ]サー	アカ[チチ]（暁）
バサ[ナイ]（芭蕉の実）	(バサ[ナ]イヌ)	(バサ[ナ]イェー)	ティガ[カイ]（手掛かり）
アサ[バン]（昼飯）	(アサ[バン]ヌ)	(アサ[バ]ノー)	チン[ナン]（蝸牛）
アチョー[ル]（仲買人）	ア[チョー]ルヌ	ア[チョー]ロー	ヒコー[キ]（飛行機）
ユカッ[チュ]（士族）	(ユ[カッ]チュヌ)	(ユ[カッ]チョー)	（極少数とある）
チコン[キ]（蓄音機）	(チ[コン]キヌ)	(チ[コン]ケー)	

音構造表示

○○○○	○○○○ヌ	○○○○ヤ	
[○ー]○ー	[○ー]○ーヌ	[○ー]○ーヤ	
[○○]ン○	([○○]ン○ヌ)	([○○]ン○ー)	
○[○]○○	(○[○]○○ヌ)	○[○]○○ー	○[○]○イ, ○[○]○ー
○ー[○ー	○ー○ー[ヌ	(○ー○ー[ヤ)	○○[○ー
○ン[○○	○ン[○]○ヌ	○ン[○]○ー	○○[○○

⁶ ンの直前で音調が変わる唯一の例だが、[カー]チーと同じとあり、語彙リストにもあるので誤植ではないと判断。「の」由来よりも、語頭3モーラが高くはならないという制約のためと見る。

⁷ この型は、「朝晩、アトゥサチ（後先）、イチシニ（生死）、ウミヤマ（海山）、カチマキ（勝ち負け）、タティユク（縦横）、ユルフィル（夜昼）」の対比語が多い。他に「アルトゥチ（ある時）」がある。また、[カー]チーの上上下下に対して、[キイー]ムンと[シン]パイは上上中中とあるも、語彙リストには「心配」は上上下下とあり、同一扱いする（「良い物」はリストになし）。

⁸ この型は、敬称の接頭辞「ウ（御）」が付いたものばかり、とある。後部要素は、グシ[ク]（城）、トゥ[スイ]（年寄り）、マチリ（祭）で、アクセントの型は無関係。なお、「お送り」は[ウー]クイとなる。ただし、語彙リストには、ウ[ク]サン（奥さん）の例も出ている。

○○[○イ	(○○[○]イヌ)	(○○[○]○ー)	
○○[○ン	(○○[○ン]ヌ)	(○○[○]ノー)	○ン[○ン
○○ー[○	○[○ー]○ヌ	○[○ー]○ー	
○○ッ[○	(○[○ッ]○ヌ)	(○[○ッ]○ー)	
○○ン[○	(○[○ン]○ヌ)	(○[○ン]○ー)	

2.2.4 5モーラ語を集めると(6)のようになっている。単独形と助詞付き形で掲載語例の異なるものも出てくる。語彙リストも参照しつつ引く。助詞付き形は、ほとんどが()付きになる。以下、「が/は」を問わず、助詞付き形はまとめて示す(長音終わりが「は」の例)。後部要素が3モーラ語のものには、音構造表示ではその境界の前に「|」を付けて示した。

(6) ニータムン (間食)	ニータムノー	
マタンマガ (曾孫)	マタンマ]ガー	(ンは音節形成音。ンマガは孫)
[コー]グワーシ (落雁=粉菓子)	[コー]グワーシエー	
フィラ[ファ]グサ (おおぼこ)	フィラ[ファ]グサー	
ウー[シ]バー (臼齒)	(ウー[シ]バーヌ)	
ウェー[キン]チュ (金満家)	(ウェー[キン]チュヌ)	
チンチ[ナー] (ひばり)	チンチナー[ヌ	アタビ[チャー (蛙)
シジリ[バク (硯箱)	(シジリ[バ]クヌ)	
クミヲウ[ルイ (組踊)	クミヲウ[ル]イエー	
マルヌ[ムン (間食)	(マルヌ[ムン]ヌ)	
ウーンカ[シ (大昔)	(ウーン[カ]シヌ)	(ンは音節形成音。ンカ[シ)
ティーサー[ジ (手拭)	ティー[サー]ジェー	
ヤマトウン[チュ (日本人)	(ヤマ[トウン]チュヌ)	

音構造表示

○○○○○	○○○○○ー	
○○○○○	○○○○]○ー	
[○ー]○ー○	[○ー]○ー○ー	
○○[○]○○	○○[○]○○ー	
○ー[○]○ー	(○ー[○]○ーヌ)	
○ー[○ン]○	(○ー[○ン]○ヌ)	
○ン○[○ー	○ン○○ー[ヌ	○○○[○ー
○○○[○○	(○○○[○]○ヌ)	
○○ ○[○イ	○○○[○]○ー	
○○○[○ン	(○○○[○ン]ヌ)	
○ー ○○[○	(○ー○[○]○ヌ)	

○ー|○ー[○
○○○ン[○

○ー[○ー]○ー
(○○[○ン]○ヌ)

ここで注目されるのは、ニータムンとマタンマガが単独では同型であるのに、助詞（は）が付くと別になり、前者はそのまま続くのに対して、後者は「中」の位置から第4モーラの後で下がるとある点である。大湾は、両者を「平板式」に含めている。また、シジリ[バクとウーンカ[シの語末の上昇位置の違いも問題になるが、これには後部要素が2モーラ語の「箱」であるか3モーラ語の「昔」であるかが関与している⁹。後に再述する。

2.2.5 最後に、6モーラ語は(7)の通り。ここになると、キイーニー]ブイ（居眠り）のように、単独形でも「中」で始まって最後の2モーラが低くなる型が数例出てくる。他に、マユナカ]グル（真夜中ごろ）、ヤナシン]シー（悪い先生）、ヤナワラ]バー（悪童）がある。

また、助詞付き形で語末2モーラが下がるクンチブスク（根気不足）に対して、(6)の語末まで下がらないニータムン（間食）に当たる例の有無については何も記載がない。

もう一つ、単独形は記載はないが、キイー]シンシーヤ（良い先生は）の例がある（1933: 22。厳密にはキイーは「中線の上」で、キイーニー]ブイエーの「中線の下」とは異なる）。一方で、類例の[キイー]ムン（良い物）は上上中中とある。「良い先生」は2アクセント単位の可能性もあるが、(6)の[コー]グワーシ（落雁=粉菓子）に当たる例と見て挙げておく。

6モーラ語で記載のない助詞付き形は、5モーラ語までの類推で推定した。それと異なるまとめ方をしていると見られる箇所（1937a: 33）もあるが、単純に多数派にまとめたものと見ておく。なお、7モーラ語については名詞の例は掲載がない。

- (7) クンチブスク（根気不足） クンチブス]コー
キイーニー]ブイ（居眠り） キイーニー]ブイエー（助詞付き形は 1933: 22）
(キイー]シンシー)（良い先生） キイー]シンシーヤ（良い先生は）（語頭は [か]
ア[ワ]リナムン（哀れな者） (ア[ワ]リナムンヌ) (2アクセント単位形か?)
ウ[ルン]トゥンチ（御殿殿内） ウ[ルン]トゥンチャー
ンカ[シ]バナシ（昔話） (ンカ[シ]バナシヌ)
ウヤ[チョー]レー（親兄弟） (ウヤ[チョー]レーヌ)
サーター[ヤー]（砂糖屋） (サーターヤー[ヌ] タバクイ[リー]（タバコ入れ）、
チレーク[ニー]（人参=黄大根根）
サーター[ダル]（砂糖樽） サーター[ダ]ロー
ククルア[タイ]（心当たり） (ククルア[タ]イヌ)

⁹ この現象の指摘は、那覇市の中心部とは異なる垣花方言についてではあるが、すでになされている。「複合語をつくり出す場合に、うしろに結びつく語が奇数のモーラの語であるか、偶数モーラの語であるかによって、そのアクセントの音声的な型が左右される。」（比嘉政夫 1960: 36）。

チーチー[ビン (牛乳瓶=乳瓶) (チーチー[ビン]ヌ)
 ウシルシガ[タ (後ろ姿) (ウシルシ[ガ]タヌ)
 ウムティゲー[イ (表替え) (ウムティ[ゲー]イヌ) クムイリン[チ (曇り天気)

音構造表示

○○○○○○	○○○○○○]○ー	
○○○○]○○	○○○○]○○ヌ	
(○ー]○ン○ー)	○ー]○ン○ーヤ	(語頭は [か)
○[○]○○○ン	(○[○]○○○ンヌ)	
○[○ン]○ン○	○[○ン]○ン○ー	
○○[○]○○○	(○○[○]○○○ヌ)	
○○[○ー]○ー	(○○[○ー]○ーヌ)	
○ー○ー[○ー	(○ー○ー○ー[ヌ)	○○○○[○ー, ○○ー○[○ー
○ー○ー[○○	○ー○ー[○]○ー	
○○○ ○[○イ	(○○○○[○]イヌ)	
○ー○ー[○ン	(○ー○ー[○ン]ヌ)	
○○○ ○○[○	(○○○ ○[○]○ー)	
○○○ ○ー[イ	(○○○ [○ー]イヌ)	○○イ ○ン[○

2.3 アクセントの対立数

2.3.1 2モーラ語は、単独では1種類に中和しているが、助詞付きでは3種類に分かれる。ただし、長母音を含む語は2種類しか対立がない。

2.3.2 3モーラ語になると、特殊拍の振る舞いも絡み、複雑な交替を見せる。まず、マチヤ(店)の系列は問題ない。ヤマ[トゥ(大和)とタカ[ラ(宝)は、単独形はナガ[ニ(背骨)と同じであるが、助詞付きの形がヤマ[トゥヌ対ナ[ガ]ニヌで異なり、アシ[ジャ(下駄)のように助詞付きで両型を併用するものもあることから、ナガ[ニと対立する別の型としなければならない。語末が長音で終わるグ[ユー(御用)は、ヤマ[トゥと音構造の面で相補分布をなし、平調である長音節ゆえに取った音調と見られ、音韻的に同一の型とする。

一方、ナガ[ニは、助詞付き形がナ[ガ]ニヌと大きく交替する。ク[ムイ(池)とハ[サン(鉄)は、ク[ム]イヌ、ハ[サン]ヌとなるが、二重母音副音と撥音から予測可能な相補分布をなしている。マー[チ(松)も、[マー]チヌと大きく替わるが、これも長音節はその内部に音調変動を含まないことにより説明可能である。ナン[カ(七日)、ウツ[トゥ(弟)、クイ[ミ(暦)も同様の交替をするものと見る。要するに、これらの助詞付き形は、その文節の前次末モーラ(一③)が中核となり、それを含む音節全体が高くなるのである(下降に関しては二重母音を除く)。従って、ナガ[ニ、ク[ムイ、ハ[サン、マー[チは、いずれも音韻的に同一の型と認定される。

ちなみに、先述のグ[ユー]の語末長母音形は、一見、ク[ムイ]、ハ[サン]と語末重音節内の相補分布でまとめられそうにも見えるが、助詞付き形が例外なく上昇が後ろにずれて、グユー[ヌ]と最後の助詞が高くなる。これを、下降が前にずれるク[ム]イヌと、さらには上昇・下降ともに前にずれるナ[ガ]ニと一緒にすることは、音声的に無理である。

従って、結論として、3モーラ語には、2モーラ語と同じく3つの型があることになる。ここまでの段階では、那覇方言は三型アクセント体系であると思われるかもしれない。

2.3.3 しかし、**4モーラ語の(5)**では対立数が増える。アカガイは問題ない。ター[リー] (大人) は、3モーラでの相方となっていた○○○[○~○○○[○ヌ (語末長母音を含まない型) が欠落しているものの、その助詞付き形の音調から、やはり他とは別の型と見る。

ラン[ガサ] (洋傘) からアサ[バン] (昼飯) までの語末2モーラの上昇に対して、アチャー[ル] (仲買人) 以下は、重音節は平調を取るという制約により最終モーラだけが上昇しているもので、しかもそれらの助詞付き形が、いずれもその文節の前次末モーラ (一③) を中核として高くなり、それを含む (やはり二重母音を除く) 音節全体が高くなっていることから、ラン[ガサ]からチコン[キ] (蓄音機) まではすべて音韻的に同一の型と解釈される。

問題となりそうなのは、注6にも触れた[ウミ]ンチュ (海人) である。しかし、ンの問題はあっても、何ら問題のない[ウミ]バタ (海端) も語彙リストに載っており、形態条件は違っても、ウ[グ]シク (お城) とは自ずと別の型となる。残る[カー]チー (夏至) は、ウ[グ]シクと相補分布によりまとめる案も可能であるが (注8「お送り」の[ウー]クイも参照)、著者は[ウミ]ンチュと同一扱いしており、その内省に従うべきであろう。

結論として、アカガイ；ター[リー]；ラン[ガサ]からチコン[キ]まで；[ウミ]ンチュと[カー]チー；そしてウ[グ]シクと、4モーラ語には5つの対立が認められることとなる。

2.3.4 **5モーラ語の(6)**に移る。まず、シジリ[バク] (硯箱) 以下については、既述のように、複合語後部要素のモーラ数が2モーラか、3モーラか (「箱」かウーンカ[シ]の「昔」か) によって決まる。ただし、クミヲウ[ルイ] (組踊) の「踊り」については、語末が二重母音であるという音韻条件の方が優先される。また、ティーサー[ジ] (手拭) については、後部が3モーラ語であり (サー[ジ] 鉢巻き)、また、次末重音節語であることから、この型しかありえない。どちらの場合も、助詞付き形は、文節前次末モーラが高さの中核となり、その音節構造により、シジリ[バク]ヌ、ウーン[カ]シヌ、ティー[サー]ジェーのように音調型が決まる。ウーンカ[シ~ウーン[カ]シヌは大幅な交替に見えるが、その仕組みは他と同じである。従って、例外がない限り、両者は音韻的には同じ型と解される。

実際、その語彙リスト等を見ると、(8)と(9)のようになっていて例外はない。(6)の既出語と、アシビ[ニン] (遊び人)、アトマー[シ] (後回し)、イチム[ルイ] (行き戻り) のような音節構造から自明なものは除く。6モーラ語にも当てはまるもので、その一部を加えておく。「水盃」は「水」と「盃」に別れるが、その「盃」の最後の形態素「つき」が問題となる。

- (8) アシビ[グトウ (遊び事), アンラ[ムシ (油虫), ウムイ[クミ (思い込み), カタキ[ウチ (敵討ち), ククル[ガキ (心掛け), ククル[ムチ (心持ち), コーリ[ガシ (高利貸し), トゥーイ[ミチ (通り道), ローグ[バク (道具箱); アマライ[ミジ (雨垂れ水), ウランダ[グチ (西洋語), ジュールク[ニチ (十六日), ミジサカ[ジチ (水盃), ...
- (9) イチワカ[リ (生き別れ), ウヤググ[ル (親心), ウヤユジ[リ (親譲り), タチバナ[シ (立ち話), タビジタ[ク (旅支度), チラユグ[シ (面汚し), ティーブク[ル (手袋), ハギチブ[ル (髡げ頭), ムヌワシ[リ (物忘れ); ウシルシガ[タ (後ろ姿), ケーシムル[シ (釣り銭, 返し戻し), チュクイバナ[シ (作り話), ...

この表面的な差を生み出している仕組みは、私見では、後部形態素の語頭から2モーラ単位の「フット」を形成し、単独形においては最終フットを高くすることによると考えられる。詳しく言うと、フット形成には重音節も関与し、重音節は自動的に1フットとなる。従って、(4)の例では、(ナガ)(ニ), (ク)(ムイ), (ハ)(サン), (マー)(チ), (8)の例ではアシビ-(グトウ), (9)の例ではイチ-(ワカ)(リ)というフットが形成されることになる。1モーラも不完全であっても1フットを形成すると見る。前部要素はここでは問題としない。

ただし、2.2.3で触れた、ティウ[クリ (手遅れ), ユフ[カシ (夜更かし) など、前部要素が1モーラの場合は、後部が3モーラ (遅れ, 更かし) であっても、この規則は当てはまらない。4モーラ語はフット形成に当たっては複合語扱いされず、形態素境界とは独立に、(ユフ)([カシ) のように2モーラフット2つからなると扱われるものと見る。

戻って、フィラ[ファ]グサ (おおぼこ), ウー[シ]パー (臼齒), ウェー[キン]チュ (金満家) は語頭から3モーラ目が高さの中心となり、最後の形はそれを含む撥音節全体が高くなる。その結果、助詞付き形のウェー[キン]チュヌはティーサー[ジの交替形ティー[サー]ジェーと中和するが、元の型は別である。[コー]グワシは、もとより、これらと対立する別の型である。

もう1つの問題、「ニータムン」と「マタンマガ」に関しては、その1933:21に助詞付き形が1例ずつ出ているだけで、1937a,bには記載がなく、当初はこの区別を見落としていたくらいであるが、5モーラ以上の動詞ではこの区別が挙げられており¹⁰、6モーラ名詞にも例がある以上、存在は確かとする。この分析は次節に譲り、ここは両者は同型と扱うことにする。

こうして、[コー]グワシ; フィラ[ファ]グサからウェー[キン]チュが同じ; チンチ[ナー; シジリ[バクからヤマトウン[チュが同じ、それに、ニータムンとマタンマガは同一扱

¹⁰ 動詞には触れる余裕がないが、私の分析では名詞とは条件がまったく異なる。まず、複合動詞の場合は、前部が無核型、後部が4モーラ4段活用語 (そのアクセントは無関係) に下降が現われる。ンミタティーン (埋め立てる) に対するンミアー]スン (埋め合わす) を参照。なお、7モーラ語に2例しかないが、後部が5モーラ語の場合は一段活用でも下降が現われている。今一つは、ウイケー]スン (売り買いする) のようなサ変動詞である。ただし、アマーカスン (甘やかす) 対ユクテー]ユン (横たえる) のように、単純動詞では今のところ予測が困難である。

いできることになると、5モーラ語には5つの対立があることになる。

2.3.5 同様にして、(7)は、クンチブスクとキーンニー]ブイが同一扱いきるとし、[キーン]シンシーも1単位形だとすれば、ア[ワ]リナムンはウ[ルン]トゥンチと同一（仮にア[ワ]リナムンが2単位形として外しても対立数には影響せず）、ンカ[シ]バナシとウヤ[チヨール]レーが同じ、サーター[ヤーは別、そしてサーター[ダル以下はすべて同一となると、6モーラ語には5つの対立があることになる。

2.3.6 未証明の部分は残るが、**那覇市方言は五型アクセント体系である可能性**があることになる。5、6モーラ語の解釈次第では多型アクセントの可能性も残すものの、三型アクセント体系ではないことは確実である。今回もまた、南琉球とは異なるアクセント体系が北琉球に見つかったことになる。

2.4 複雑な交替の背後にある2つの仕組み

このかなり込み入った分析をすることになった体系の背後にある仕組みを考えてみよう。

2.4.1 まず、すでに指摘があるように、この方言には独自の制約がある。金田一春彦(1975[1960]: 142)に「琉球語のアクセントには内地諸方言のアクセントには見られない一つの特色があると思う。それは、《○●○調または●●○調のような、最後の1音節だけを低める音調を嫌う》という傾向が強いことである」と書かれてある現象で、那覇方言の○●●型[ただし、○○●型とは別と見ている]に1音節の助詞を付けると○●○△型になることを指摘し、単独の場合に○●○型であるはずのものが○●●型になっているのだと解している。同じ主旨を、比嘉政夫(1960: 30, 37)も「最後から2番目のモーラには核はこない」と述べている。

以下、これに基本的に同意した上で私なりの解釈をする。厳密に言うと、これは(単語単独を含む)文節単位で適用されるもので、その②の位置での下降を禁ずる「文節次末下降禁止制約」(略して、下降位置制約、下降制約などとも)と呼ぶことにする

(5)から見ていく。ラン[ガサ、バサ[ナイ、アサ[バン、アチョー[ル、ユカッ[チュ、チコン[キは、古くは *ラン[ガ]サ、*バサ[ナ]イ、*アサ[バ]ン、*アチョ[一]ル、*ユカ[ッ]チュ(～*ユ[カ]ッ)チュ、*チコ[ン]キであったと考える¹¹。すべて同じ型である。その単独形の次末位下降が制約によって保てなくなったことを受けて、その代わりに最終フット全体を高くする変化が生じた。*(ラン)([ガ]サ)>(ラン)([ガ]サ)、*(バサ)([ナ]イ)>(バサ)([ナイ)、

¹¹ この段階ですでに重音節全体が高い*ア[チョー]ル、*ユ[カ]ッ)チュ、*チ[コン]キになっていたとしても構わない(特に*ユ[カ]ッ)チュはその方が自然)。それでも*ラン[ガ]サと音韻的には同じ型である。その場合は、最後に重音節制約は不要で、より簡単になる。他の長さでも同様である。ただ、フット内で上昇し、特殊拍の場合はより不安定で最終フットへの移行がしやすい案を本文には掲げてみた。後述のグ[ユー<*グユ[一]などの変化も考えてのことである。

* $(アサ)([バン]) > (アサ)([バン])$, * $(ア)([チヨ[-]])(ル) > (ア)([チヨ-])([ル])$ などで、その結果が現在の単独形である。ところが、1モーラ助詞付き形は、この文節次末の環境から外れているために元のままラン[ガ]サヌなどで残った。その後、その高い部分を含む重音節は(二重母音を除き)音節全体が高くなったのが今のア[チヨ-]ルヌなどである。その際、ンだけはアサ[バン]ヌと下降制約を免れた。

(4)のナガ[ニ, ク[ムイ, ハ[サン, マー[チも, 元は*ナ[ガ]ニ, *ク[ム]イ, *ハ[サ]ン, *マ[-]チで、4モーラ語と同じく、* $(ナ[ガ])(ニ) > (ナガ)([ニ])$, * $(ク)([ム]イ) > (ク)([ムイ])$, * $(ハ)([サ]ン) > (ハ)([サン])$ などの変化を受けた結果が今の単独形である。ここでも、文節次末下降制約が働かない1モーラ助詞付き形はナ[ガ]ニヌ, ク[ム]イヌなど、元のまま残った。ただし、*ハ[サ]ンヌと*マ[-]チヌは、高い部分を含む重音節全体が高くなり、ハ[サ]ン]ヌ, [マー]チヌに変わった。

(6)(7)でも、これらに相当する型は同様である。たとえば(6)は、*シジリ[バ]ク, *クミヲウ[ル]イ, *ウーン[カ]シ, *ティーサ[-]ジ, *ヤマトウ[ン]チュなどである。

その意味で、これらは助詞が付くと交替が起こるのではなく、実は単独形の方が変化した結果なのである。助詞付き形は重音節の音調にわずかな変容が生じたに過ぎない。

なお、これらと対立するグ[ユー, ター[リー等は、*グユ[-]~*グユ[-]ヌ, *ターリ[-]~*ターリ[-]ヌ等で、その環境から、ここでは1モーラ助詞付きの方に文節次末下降禁止制約が掛かった結果、最終フットへ高さが移行して* $(グ)(ユ[-])(ヌ) > (グ)(ユ-)([ヌ])$, * $(ター)(リ[-])(ヌ) > (ター)(リー)([ヌ])$ となった。一方で、単独形の*グユ[-, *ターリ[-は、上昇を含んでいた重音節全体がそのまま高くなったのが今のグ[ユーなどの形である。並行的に、「大和」も *ヤマ[トゥで、*ナ[ガ]ニとは別だったことになる。

大湾は1モーラ助詞付き形しか記載していないが、私が20年前に垣花方言(話者は故比嘉政夫氏)で2モーラ助詞付き形を聞いた結果は(10)のようであり、(両方言がこの点に関しては同じであるとの想定の下での話であるが)先の推定を裏付ける。語例の異なる部分は、ガマ[ク(腰)はナガ[ニと、チチナガ[ミ(月見=月眺め)はウーンカ[シと、ヌク[ジリ(鋸)はラン[ガサと、アカチチ[ウキ(早起き=暁起き)はサーター[ダルと同じである。

(10) 垣花方言の例	1モーラ助詞ヌ	2モーラ助詞カラ
ガマ[ク(腰)	ガ[マ]クヌ	ガマ[ク]カラ
チチナガ[ミ(月見)	チチナ[ガ]ミヌ	チチナガ[ミ]カラ
ウシルシガ[タ(後ろ姿)	ウシルシ[ガ]タヌ	ウシルシガ[タ]カラ
ヌク[ジリ(鋸)	ヌク[ジ]リヌ	ヌク[ジリ]カラ
シジリ[バク(硯箱)	シジリ[バ]クヌ	シジリ[バク]カラ
アカチチ[ウキ(早起き)	アカチチ[ウ]キヌ	アカチチ[ウキ]カラ

要するに、文節次末(-②)の下降だけが許されないのであって、2モーラ助詞が付く

とその制約の対象外となり、その前の名詞は単独形と同じまま出現するのである。なお、これらの単独形も、文節次末下降制約と最終フットの高まりの変化を受けた結果である。

このように考えると、なぜ2モーラ語では3つの型が中和してしまうかの理由も見えやすくなる。(1)にルシヌ(友)、アミ[ヌ(雨)、[フ]ニヌ(船)の例を挙げたが、「船」は本来*[フニ]ヌで(垣花方言の[フニ]カラも比較)、それが下降制約で[フ]ニヌに変化したものである。となると、元の単独形は*[フニ]だったと推定される。一方、「雨」はアミ[ヌであることから、ナガ[ニと同様に、元は*ナ[ガ]ニと同じく*ア[ミ]ヌだったと考えられ、その単独形は*ア[ミ]となる。しかるに、上昇タイプの2モーラ単独形は語末フットに当たるので(ア[ミ])>([アミ])の変化が起こったと考えると、[フニとの区別が失われる。残るルシ(友=同志?)は、3段観では「中中」とされるものの、実際は垣花方言では京都方言などの「風、鼻」とほとんど同じで、「高平ら」と言って良いほどである¹²。そこから三者が合流するのは時間の問題だったことになる。

2.4.2 いわゆる平板式に見られる下降

最後に、(6)のニータムン(間食)～ニータムノーとマタンマガ(曾孫)～マタンマ]ガー、(7)のクンチブスク(根気不足)～クンチブス]コー、キイーニー]ブイ(居眠り)～キイーニー]ブイェーの扱いに移る。挙例はこれがすべてである。

私見では、関西方言の類推で言えば、語末が上昇するタイプ(低起上昇式に当たる)と同様、この非低起(分かりやすく言えば高起)平進式においても語末形態素が2モーラか3モーラかが絡んで来る。その関与の仕方がよく似ているのである。

このあとは語頭に[の記号を付けて明示的に示すと、(6)の[マタンマガは、本来*[マタンマ]ガと下降を持っていたと考える。その後部3モーラ形態素の-シマ]ガの形は、低起上昇式の*ナ[ガ]ニと上昇は違いますが下降に関しては同じである。「大昔」の*(0)-(シ)(カ)>(シ)(カ)の変化(無関係な前部要素は0で示す)に並行して、平進式の[-シマ]ガにおいても文節次末下降禁止制約が働いて*(0)-(シマ)(ガ)>[(0)-(シマ)(ガ)となった結果、[マタンマガとして実現する(語末の下降]は、残っていたとしても音声的には実現しない)。その単独形を見るとあたかも下降など何の関係もないようであるが、それに1モーラ助詞が付くと、次末環境ではなくなるために本来の下降が姿を現わして[マタンマ]ガーとなるのである。すなわち、マタンマガは、いわば平進式の④型ということになる。

(7)のクンチブスクも同様で、本来は*[クンチブス]クなのだが、単独形では*(0)-(ブス)(ク)>[(0)-(ブス)(ク)で下降が実現しなくなるものの、1モーラ助詞付きでは、次末位ではなくなるので元の下降がそのまま[クンチブス]コーと実現する。すなわち、(6)(7)の両語ともに下降の実現の有無は環境による変異に過ぎないことになる。両語に共通するのは、後部が3モーラ形態素で、その②の位置に下降がある点である。

¹² 垣花方言の母語話者である比嘉(1960)が、この型を●●ではなく○○で表記しているものの、音韻表記では高くはじまる型に分類していることも参照。

では、(7)の[キイーニー]ブイ（居眠り）～[キイーニー]ブイェーはどうなるか。この下降は末尾から3モーラ目にあるので制約の影響は受けずにそのまま実現する。そして、ウー[シ]バー（臼歯）～ウー[シ]バーヌに見るように、語末から3モーラ目以前にある下降（とその前の上昇）は固定していて動かないので、助詞付きでも同じ位置のまま[キイーニー]ブイェーとなることの説明がつく。なお、「居眠り」のフットは[0-(ニー)](ブイ)で、「根気不足」の*[0-(プス)](ク)との共通性を探るとすれば、語末から2番目の「次末フットに下降が出る」となる可能性がある。それが言えるとなれば、外形の違いを超えて両者が一層同じ型と解され、違いは後部要素が3モーラか2モーラかだけとなりうる。

しかしながら、最後に残った(6)の[ニータムン]は難問である。この語源は未詳であるが、後半はムン（物、食べ物）の2モーラ形態素であるに違いない（類義語のマルヌ[ムンは「間の(食べ)物」]）。そうなると、もしもこれも次末フットに下降があるとしたら *[(ニー)(タ)](ムン)であり、制約を受けないのでそのまま下降が実現してしまい、事実と合わなくなる。助詞付き形も*[ニータ]ムノーとなるはずである。

そこで、別型の*[(ニー)(タ)](ムン)を出発点として、下降制約により下降が実現しなくなると見れば、単独形の[ニータムン]は引き出すことができる。しかし、助詞付き形は*[(ニー)(タム)](ノー)から[ニータム]ノーにしかならず、[ニータムノー]は導き出すことができない。このニータムノーの例は、1933: 21 にマタンマガーと隣り合って別の型として三線譜の上にならされており、誤記とは考えにくい。

それを受けて考えられることとしては、撥音が制約適用外となる CVN で終わり（これはすでに*[(ニー)(タ)](ムン)を立てる際に利用している）、かつ「は」助詞付き形が融合形になる場合に限り、元の*[(ニー)(タ)](ムン)の語末フットの下降を引き継いだ*[(ニー)(タム)](ノー)となり、これに下降制約が適用されて下降が実現しなくなって[ニータムノー]となる、とする案ぐらいである。しかしながら、類例はまったく挙がっておらず、今これを検証することはできない。

もしも具体例でこの案が否定されたとすると、残る解決案としては最初から下降のない*[ニータムン]を想定せざるを得なくなり、*[マタンマ]ガとは対立することになる。いわば平進式の中に下降の有無の対立があるとすると、6モーラ語にも同じことが予測され、アクセント体系が一層複雑になってくる。しかし、それを探る資料はない。そもそも本節のここまでの考察も、わずか4例に基づくものである。

最後の例が未確定のまま残ってしまい、体系全体を提示するところまで行かなかったものの、この80年以上も前の書かれた資料を見直すことによって、これまで知られていなかった体系の存在がほぼ確実になったと考える。今後のアクセント研究に対する一つの道標となり、那覇方言を深く研究する人が現われるとすれば幸いである。

[参考文献]

大湾政和（1933）『琉球方言資料』沖縄県師範学校郷土室内〔表紙には昭和7年とあるも、

続く 1937 の「序」に「昭和 8 年」とあるのに従う。奥付けに刊行月日はないが、昭和 7 年度の刊行で、昭和 8 年 3 月ごろかと判断。]

大湾政和 (1937a) 『語調を中心とする琉球語の研究』, 沖縄県師範学校.

大湾政和 (1937b, 1970) 「アクセントに現れた東京語と那覇語」伊波普猷先生記念論文集『南島論叢』, 沖縄日報社: 223-241. [1937a は 5 月, 1937b は 7 月の刊行となっているが, 1937a の第 4 章は同じ章題で内容も近く, またその序に「この小著の大半は未発表の論文であって」とあることから, 執筆は 1937b の方が早かった可能性がある。]

金田一春彦 (1975 [1960]) 「アクセントから見た琉球語諸方言の系統」『東京外国語大学論集』 7: 59-80. 『日本語の方言』教育出版: 129-157 に再録.

服部四郎 (1959 [1937]) 「琉球語管見」『方言』 7/10: 1-22. 『日本語の系統』岩波書店: 362-385 に再録. [岩波文庫版 1999 には再録されていないので注意]

比嘉政夫 (1960) 「旧那覇市垣花方言のアクセント体系」『国語学』 41: 28-38.